内的にも反復し続ける傾向をともないながら、実はその中枢部に、労働力の再生産、および資本によるその使用過程での企業内秩序の二面にわたり、市場での自由・平等な契約関係とは異なる直接的な人間関係をかならずふくんで発展する性質を有しているものとみなければならない。そこに、古くからの共同体的人間関係を維持していた協力と支配の関係が、ジェンダー関係においても近代的に組み替えられながら継承され存続するいわば社会的なスペースが、資本主義の発展に反する原理としてではなく、むしろその不可分な要素として与えられていることに注意しておかなければならない。

かつて宇野弘蔵は、「日本資本主義の特殊構造と農業問題」を論じたさいに、「資本主義は、その発生、発展、確立に障害とならない限り、旧社会の残存物をも許容するのである。そればかりではない。時には逆にかかる残存物の温存さえ求めることになる」と述べていた[8]。それは直接的には、日本資本主義に残存する小農層の意義について述べられたことであり、天皇制の役割にもつうずることとされていたのであるが、資本主義の発展は一般的に、より中枢的な労働力商品の使用と再生産をめぐる企業内組織と家族関係とにおいて、旧社会からの残存物として家父長制的人間関係の温存を許容し、求めやすいスペースを内包していたわけである。もっとも、そこにみられる直接的人間関係にふくまれうるジェンダー差別を、前近代的家父長制の残存とのみ規定するだけでは不十分であって、資本主義の発展にともなう近代的な家父長制やジェンダー関係の発展・変化の意義を企業内組織と家族関係とに分けて分析整理する作業が必要とされている。それをつうじ、とくに家族関係が大きく流動化し変化しつつあるなかで、現代的な企業の人事管理などにいぜんみられるジェンダー差別に家父長制という規定がなお妥当かどうかも反省を求められることになるかもしれない。

第二に、マルクス主義フェミニズムが資本主義市場経済と家父長制とを二元論的に取り扱う傾向の裏側に、ジェンダー差別をもたらす要因は前資本主義社会からひきつがれている家父長制の側にあり、資本主義市場経済自体は本来ジェンダー・ニュートラルであるという発想が事実上ふくみこまれているか、あるいは意図せざる結果として生じていないであろうか。その点では、市場経済は、本来、個人の自由、平等を公正に実現する自然的経済秩序であるとみなす新古典派理論と、意外に近い市場経済観に反転しているおそれもある。あるいは、マルクス経済学の基礎理論も、アルブリトンが述べているように、市場経済を原理的にはジェンダーには無関心に構成しているものと強く考えすぎていたのかもしれない。

しかし、直接原理論の内部の問題になるかどうかは別として、歴史を理論的に解明するマルクス経済学においては、資本主義市場経済自体の発展に右にみたような意味で、家父長制的ジェンダー差別を許容しやすい社会的スペースの存在を認めうるのみならず、その世界史的発展基盤をなす市場経済の展開にも、つぎのような意味で、本来的にジェンダー・ニュートラルとはいえない側面を認めうるのではなかろうか。すなわち、市場経済は、もともと古くから共同体的諸社会の間に発生し、発展する交易関係をなし、共同体内部の権力的、身分的支配関係とは独立に、共同体相互の、あるいはその成員が相互に接触するさいの平等な立場での合意形成を尊重しあう秩序をなしていた。それは他の共同体との経済関係をめぐり、武力や暴力で略奪し、支配征服する戦争路線とくらべ相対的に平和を維持する方策でもあった。とはいえ、古代以来の交易は、共同体の秩序の外に広がる活動であるだけに、山賊や海賊の略奪に転じたり、それへの武力防衛を要し、暴力や戦争としばしば近接する側面を有していた。こうした側面では、市場経済は、子供を産み育てる母性としての女性より、男性優位の活動領域を古くから形成していたにちがいない。

資本主義発生期の重商主義段階にくり返された海上覇権をめぐる海戦は、他国の海賊的略奪から商船を守る必要を示すところであったし、最近も、自動化されて船員数を減少させた船舶がマラッカ海峡あたりでアルミ地金などを海賊に奪われたりしている。市場経済がときに暴力的威嚇や収奪と結合しやすいことは、サラ金など負債の取り立てに暴力団が介入するような事例にもみられるところであり、ロシア、東欧諸国の市場経済化が広くマフィアの支配におかされているところにもより深刻な事態として示されている。市場経済の前提となる私有財産を守ること自体、法治社会としての制度やその仕組みが確立されるまでは、しばしばそのような暴力や私的武力に依存する側面をもっていたのであり、西部開拓時代のその経験がいまだにアメリカを銃砲社会とする歴史的背景をなしているとみてよい。

こうした意味では、アルブリトンがあらためて指摘している既婚女性の財産権が一九世紀になるまで認められなかったといったジェンダー差別は、前資本主義的家父長制が家庭のなかから公的社会領域に転化されて市場経済にも継承されたところであるとのみはいえない。むしろ市場経済の発生、拡大の歴史そのもののなかに男性優位の暴力、略奪、武力の行使などに接するいわば陰の出自をともなっていたことに注目しておかなければならない。それは遠い過去の歴史にとどまらない。グローバリゼーションの進展する現代世界において、むしろ市場経済化がマフィアの支配、インフォーマル・エコノミーにおける威嚇、不法、詐欺の横行を拡大し、あわせて女性への直接・間接の暴力的抑圧を激化する傾向があるのはなぜか。前資本主義的家父長制の作用のみに注目するのでは、むしろグローバルな市場経済の拡大深化にともない減少してゆくはずであると期待され、まさに逆説的にみえる